

## 若手会員の会 活動報告

<http://jweld.jp/welnet/index.html>

(若手会員の会からのお知らせはホームページにも掲載しています)

### 若手研究者・技術者講演会 金属材料加工シンポジウム開催報告

若手会員の会運営委員会 委員 三上 欣希 (大阪大学)

Report: The 1st symposium on materials processing for young researchers and technicians

平成 27 年 6 月 19 日 (金) に高輪和彊館 (東京都港区高輪) にて、若手研究者・技術者講演会「金属材料加工シンポジウム」が開催されました。本シンポジウムは、革新的な研究・開発を行うには、ひとつの分野に特化した知識・技術だけでなく、新たな分野からの技術導入や異なった分野を専門とする研究者・技術者が力を合わせることが特に重要であると考え、若手研究者・技術者の専門分野や学協会との垣根を超えた交流・ネットワークづくりを目的として開催されたものです。今回は、溶接学会、日本鉄鋼協会、軽金属学会それぞれの若手組織に所属する研究者・技術者により、以下のようなプログラムで講演が行われました。

プログラム (敬称略) :

第一部 溶接学会 司会：尾崎 仁志 (三重大学)

「溶接学会 若手組織の紹介」

溶接学会若手会員の会

運営委員長 門井 浩太 (広島大学)

「その場観察法を適用した溶接冶金現象と高温割れ感受性の評価」

門井 浩太 (広島大学)

「溶接プロセスの物理現象を考慮した加工部特性予測の高精度化」

岡野 成威 (大阪大学)

「溶接・接合部の切欠き靱性評価に関する数値解析アプローチ」

高嶋 康人 (大阪大学)

第二部 日本鉄鋼協会 司会：袴田昌高 (京都大学)

「日本鉄鋼協会 若手組織の紹介」

日本鉄鋼協会創形創質工学部会若手フォーラム

幹事代表 濱崎 洋 (広島大学)

「金属板材の弾塑性構成則と板材成形数値シミュレーション」

濱崎 洋 (広島大学)

「AZ31 圧延板の張出し成形性」

吉田 健吾 (静岡大学)

「付加的せん断ひずみ層を利用した線材の強化方法」

梶野 智史 (産業技術総合研究所)

第三部 軽金属学会 司会：安藤 誠 ((株)UACJ)

「軽金属学会 若手組織の紹介」

軽金属学会若手の会

世話人代表 西田 進一 (群馬大学)

「薄板連続鋳造と塑性加工」

西田 進一 (群馬大学)

「時効析出現象を原子レベルで制御した軽金属材料の高機能化」

芹澤 愛 (芝浦工業大学)

「1000 系アルミニウム合金の延性挙動」

中西 英貴 ((株)UACJ)

参加者の総数は 42 名で、内訳は、溶接学会 14 名、日本鉄鋼協会 9 名、軽金属学会 19 名 (うち学生 13 名) でした。企業からの参加者も 10 名 (溶接学会 4 名、日本



写真1 講演中の様子

鉄鋼協会3名、軽金属学会3名) ありました。

また、本シンポジウムに先立って、平成27年度 溶接学会 春季全国大会の若手会員の会イブニングフォーラムにおいて、日本鉄鋼協会、軽金属学会の各若手組織の代表を講師に迎え、各組織についてご紹介いただいております。詳細は、溶接学会誌 第84巻5号の若手編集ページに掲載されております。

さて、本シンポジウムにおける講演では、各学協会の若手組織の代表より、母体となる学協会の概要とともに、各若手組織の設立目的や活動状況の紹介がなされました。研究や業務の中で、自身の所属していない学協会の論文や委員会活動の成果を目にすることはあると思いますが、学協会としての活動状況を詳しく知る機会はありませんので、貴重な機会となりました。研究・開発に関する講演内容は、材料の高強度化・高機能化、成形・塑性加工、溶接・接合、強度・破壊特性評価など、金属材料加工の全般にわたり、本シンポジウムの開催目的のひとつである、「研究者・技術者が力を合わせる」ためのきっかけになったのではないかと思います。また、三つの異なる若手組織が合同で開催したということもあつ



写真2 シンポジウム参加者の集合写真

て、異分野の聞き手を意識した丁寧な発表が多く、同じ学協会で活動していてもあまりなじみのない内容に関して、改めて理解が深まったという利点もあったのではないのでしょうか。

講演会後には懇親会も開催され、講演に関する質問や、各学協会での活動、また、それぞれの所属する機関(学協会だけでなく、企業や大学など)における若手の活動などについても情報交換をすることができました。

本シンポジウムを通じて、互いの学協会が対象とする分野におけるトレンドや雰囲気を感じ、知識・知見を広げることに加え、やや研究対象は違えども金属材料加工を共通のキーワードとした研究・開発に従事する仲間が各分野・各地にいることを知ることができたと思います。また、今回と同様のシンポジウムは、今回の三つの学協会にとらわれずに展開することも可能です。将来、共同研究やプロジェクトのきっかけが本シンポジウム(あるいはその後継のシンポジウム)であったということを耳にすることが期待されます。

最後に、本シンポジウムの開催にご尽力いただいた各学協会の関係各位に御礼申し上げます。